

梵天勸請の段

愚凡釈と

「熱意をもって思惟する聖者の上に明らけく、縁起の法の開く時、  
天地照らす太陽の闇夜を破るそのように、悪魔の軍を退けり」

詠イダシ

釈迦牟尼仏の説きおきたまえるみ教えの、そのお覚りの顛末を語りま  
するは俄か仕立ての琵琶法師、愚凡釈と申します。

さて皆様に、釈迦牟尼仏のお悟りまでの顛末は、次のご縁に聞いてい  
ただく事として、さてこの席はその続き、梵天勸請物語、語る事とは致  
します。

(ハイリ)

ネランジャラーの畔なる ガヤーの村の ピッパラ樹 その木の下で  
無上の覚り 成就した 釈迦牟尼仏は その後も 七日七日に 場所  
を替え 思惟の内に ありました

始め七日は さとりの印 ピッパラ樹

次の七日は 無花果の樹の その下へ

三七日までは 竜王宿る ムチリンダ

四七日までは ラージャヤタナの 樹の下と

思惟の場所を 移しつつ 釈迦牟尼仏は 心の中に わだかまる 思

いあるのに 気づきまず。

それは第二の 七日間 無花果の樹の その下の 思惟の内に 起こ  
ります

釈迦牟尼仏陀の その思い 詩にあらわせば 次の様。

我が覚り得た 此の法は 甚だ深く 知り難し、

安樂にして 美妙なり。思考の域を 超えたれば

智慧ある者の 知る所。自我を楽しみ ねがう者、

縁起と名づく この法を 受け入るること 至難なり。

心の炎 消え果た 寂靜無為の ニルヴァーナ、

この理も 知り難し。我もし法を 説き述べて、人の理解を 得られず  
ば ただ徒に 世に出でて、疲労困憊 するのみか

釈迦牟尼仏は このように 思い定めて 沈黙し 世に出ようとは  
されません。

さて四七日も過ぎた時 梵天界に住まいする ブラフマーなる梵天と  
忉利天に住まいするインドラなる帝釈天 神通力を 使っては 釈迦  
牟尼仏の 思いを知って 大いに惑い 驚けり。

(クズレー)

「この世は 終わる あああ この世は 破滅する。」

二人の神は このように 悲嘆の声を 挙げながら

それぞれの 住まう天から 忽然と 姿を消して 釈迦牟尼仏の 前

に現れ 敬礼し み教えを広めたまえと 請い願うので ありました

「御身の得たる その法は 多くのものを 救いましょう どうか

世に出て み教えを 説き述べたまえ。」

それに応えて、釈迦牟尼仏ののたまうに、

「止みなん止みなん 我が悟り得た この法は 甚だ 深く 智慧

浅い 者に於いては 知り難し。」

二人の神はさらに続けて 請い願うのでありました

「世間には 智慧有る者も 者りましよう どうか世に出て み教

えを 説き述べたまえ。」

さらに応えて 釈迦牟尼仏ののたまうに、

「止みなん止みなん 我が説く 無我を 誤って 外道の無我と 取

り違え 悪を畏れぬ 者あらば かえって仇と なりぬべし。」

さてそこで 歌の文句に あるように 押してダメなら 引いてみな。

二人の神は 三度目に 衆生の苦悩に 引き寄せて 訴えたので あ

りました。二人の神は 歌います。

御身は智慧も 優れたり 普く望む 眼もあれば

真理からなる 高殿の その頂に ましませり

自身はすでに 苦を超えり ただ願わくば 苦に沈む

おおくの衆生 見そなわせ

釈迦牟尼仏は 二人の神に 促され 多くの衆生 見そなわし こ

の世に出て 説法を 始めようとの 心を定め、二人の神は 安堵して

元の世界へ 帰ります。

語りましたる この話、二人の神が現れて おとぎ話の ようですが、釈迦牟尼仏の 心の中の せめぎあい 描いたものと 言えましよう。釈迦牟尼仏は 自分が悟った 理に 突き動かされ 説法へ 向かわれたので ありました。

譬えて言えば 空行く風は 眼に見えず 家に在っては 知り難し。そよぐ草木に 行く風を 知ることもあれ、外に出て 風の動きを 身に受けて 知るよりも 確かなことは ありません。釈迦牟尼仏は 身を以って 縁起の法を 悟ります。

縁起の法のことわりは 此れと彼とがかかわって、はじめて全ては起こりくる。さればすなわち 我が執着は 破られて 自由自在の 働きを 伴うべきが 道理なり。釈迦牟尼仏が 理を 己の内に 留めれば 理自体 ぐずれ去る。そうはさせじと 縁起の法は 釈迦牟尼仏の内側で 外へ外へと 働いた。

さればまた 二人の神の勧請も 縁起の法が からだを得、 法身として 働いた その有様を 描くもの。大乘の教えの中に あらわれる 諸仏如来の 法身も この縁起の法を 本とする。

悟りの智慧は 慈悲を伴い その慈悲が 方便手立て 伴って 初めて智慧と 呼べるもの。釈迦牟尼仏の み教えが 八万四千 法門と呼ばれる訳も そこにある。

さればまた 阿弥陀如来の お誓いも 悟りの智慧を 本とする。

如来の作願を 尋ねれば 苦悩の有情を 捨てずして  
回向を首と したまいて

大悲心をば 成就せり（正像末和讃）

語りましたる 一段は 梵天勧請 物語

続きの段は いずれまた 次のご縁と 致しましょう

おしまいに 言わずもがなの ことながら 御聴聞たまわりました  
うえからは 拍手喝采 いただくよりも 念仏申してくださいました  
わか仕立ての琵琶法師 これに過ぎたる果報なし これに過ぎたる果  
報なし

（キリ）